郷土史への扉

西郷隆盛と霧島

その⑪ 西郷南洲と書

今年は国内最後の内戦「西南の役」が終結し、西郷隆盛が没して一四〇年の節目の年です。

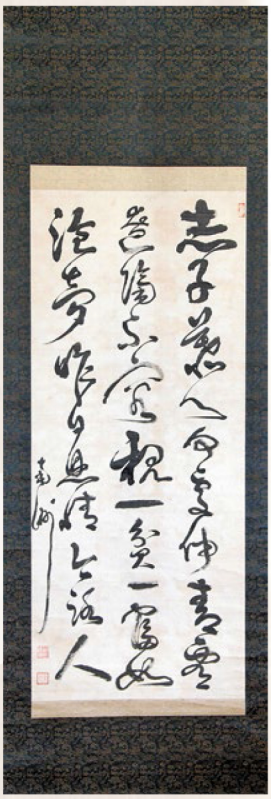
今回は、西郷隆盛（※1南洲）と「書」について紹介します。

郷中教育時代の西郷

大変貧しかった西郷家でしたが、教育はしっかり受けるようにという父親の勧めで、西郷は大久保利通たちと「下加治屋郷中」で学びました。

小稚児（六～十歳）の頃は主に※2漢籍を学び、長稚児（十一～十五歳）になると※3藩校であった造士館で学問や武術などを学びました。十三歳のとき、西郷は友人との諍いによって右腕に傷を負い、刀を振ることができなくなりました。それ以降、武術を諦め学問で身を立てようと志しました。

後年、西郷が漢詩を詠み、書に長けていたのも、幼少期の負傷がきっかけとなったのではないかと思われます。



西郷南洲の書『失題』
国分郷土館所蔵

西郷南洲が霧島に残した書

日当山温泉に滞在中、地元の人々と交流を深め、さまざまな逸話を残している西郷は、お世話になった人に乞われて、多くの書も書いています。

現在、霧島市が国分郷土館に所蔵している三※4幅の書は、明治九（一八七六）年頃、西郷が国分上小川の山内甚五郎に書いた物とされています。

山内甚五郎は西南の役で、薩摩軍の第七番大隊十一番小隊の分隊長として戦いました。精悍な容姿に※5質実剛健、剣術は真影流を学び、鉄砲にも長けていたことから、西郷にかわいがられていました。

三幅の書のうち、ここでは西郷の心情が最も表れている『※6失題』（右写真参照）を紹介します。

赤子慕心何処伸
青雲遼隔不容親
一貧一富如泡夢
昨日恩情今路人

（要約）

子どもが母親を慕うように、主君を思う深い誠をどこに向かって伸ばすことができようか。青雲がはるか遠くにあって、親しみ近づくことができないのは遺憾の至りである。

私はこのたび、主君の怒りに触れ、忠誠の心の落ち着く先を失って寂しさに堪えない。しかし人情が変貌することも同じようなもので、貧乏人が金持ちになったり、金持ちが貧乏人になったりと、人生はまるで水の泡のように、また夢のようだ。昨日まで恩情の厚かった人も、今日は初めて出会ったときのようになってしまうのは、何と情けないことであろうか。

（解説）

明治五（一八七二）年六月に明治天皇が鹿児島に行幸された折、西郷が主君である島津久光の元へあいさつに来なかったことから、怒った久光が西郷に対して同年十一月、「詰問十四か条」を発しました。

西郷は陳謝するために帰郷しましたが許されず、一時期軟禁状態となりました。この漢詩は主君に忠誠心を理解してもらえない悲しみ、もどかしさなどを詠んだと思われます。

西郷の書の特徴は、迷いがなく一気に書かれ、筆の使い方も大胆かつ繊細であることから、実直な西郷の人となりをよく表しており、西郷直筆の書は現在でも非常に人気があります。

（文責＝鈴）

※1 西郷の雅号。画家や書家などに付ける別名。
※2 漢文で書かれた書籍。
※3 江戸時代、藩が設立した学校。
※4 掛け軸の数え方。
※5 真面目で心身共に強く、たくましいこと。
※6 題名がないということ。